

心理学シリーズ 人間嫌い編 <その6>

～兄弟姉妹の世界～

2007. 7. 31

タツノオトシゴ



前回の恋愛編が終わり、次なる世界へ・・・

身近に居ながら遠い存在、それは兄弟？ それとも夫婦(^^;
『〇〇喧嘩』に入る二文字の漢字を考えてみてください。

最近の親子で、まるで兄弟姉妹のような関係を楽しんでいる母と娘たちがいます。若作りをした母親、娘と一緒にいて『まるで姉妹みたいネ!』という言葉に喜んでいます。背伸びして大人の世界を覗こうとする娘たち、父親としては気がきではありません。大人びた娘を同伴し、シャレたお店で食事が出来る素敵なお父さまには憧れます(^^; その反面、息子を恋人のように連れ回す、おばさま族にはチョッと反発が・・・

『兄弟は他人の始まり』という言葉があります。過去の歴史を振り返ると、権力の座を争う兄弟が如何に多かったかに気付きます。大河ドラマに出てくる多くの兄弟、始めは仲がよいのですが、権力の座に近づくとその仲が信頼できなくなり亀裂が入ります。一度入った亀裂は、元に戻る事はありません(^^; 義経と頼朝、木曾義仲など、一度疑念を抱くと争いごとが絶えません。さらに、その取り巻き達が火に油を注いでいます。そもそも、次男の方が長男より人望もあり、優れた人格者の場合が多く、何かの原因が発端となって対立するようです。



徳川家が長く続いた原因は、兄弟の争いをさせないよう御三家制度を作り、うまく運営させた事にあるようです。争いごとを、お互いの監視の下で制御しています。

昔、日本では家督を継ぐという制度があり、出来の悪い兄を擁護する仕組みがあります。また、「惣領の甚六」という言葉もあります。甚六は苦勞せずに禄を継ぐ「順禄」の天訛だとも云われますが、要するに、後継ぎの長男長女などは期待されるわりには、さほど能もなく、期待されていない存在なのです。幸田露伴の書いた『当世人名辞典』の「甚六」の項に、「愚にして寛洪、長者の風あるをいふ」とありますが、「転じては普通の愚人をいふ」とも付け加えています。

なぜ、弟の方に優秀な人材が多く出るのが不思議な気がしませんか？

心理学者の J.B.ワトソンは、人間の発達について環境優位説を唱えています。この説では人の発達は環境の力（＝経験）によって規定されると考え、そのため、「発達は環境によって決定する」と唱えています。

それと対立的な考え方が A.L.ゲゼルの成熟説（遺伝優位説、成熟優位説）で、「環境より遺伝の影響の方が大きい」と主張しました。例えば、普通の子どもは生まれてすぐに言葉を話せません。でも成熟説では、「時間が経つにつれて準備ができるので話せるようになる」と考えます。なお、この準備のことを「レディネス」といいます。



また、K.Z.ロレンツは、人間の発達には適当な期間があると考えました。この適当な時期のことを、「臨界期」（または「敏感期」）といいます。「レディネス」（＝準備）ができてからの一定の期間が「臨界期」なのです。

昔から、次男や次女の方が要領よく育っていきます。兄や姉のすることを横から観察し、学習しているわけですから・・・長男や長女は、大事に甘やかされて育つことが多く、何事に対してもおおらかです。それに比べると次男、次女は素早く状況を観察し、要領よく立ち廻っているような気がします（私の勝手な思い込みではなさそうです）初めのうちは、体力的に負けているのですが、ある時期からは下の子供のほうが段々と強くなってきます。塾やお稽古ごとでも、次男や次女がすぐに追いついてしまいます^^;

「私はいつも実験台にされている！」と泣いている子は多分長男や長女です。そして「あんたが年上なんだから我慢しなさい！」と怒られるのも姉や兄の方です。

世間では、世渡り上手な妹や弟を見ていると、「あいつは要領が良すぎる」と避難する声よりも、「もう少し兄や姉がしっかりしてくれたら・・・」という言葉が聞こえてきます。どちらにしても、しんどい思いを抱くのは年上の方ではないでしょうか？ しかし最近では、子供の数が少なくなり、兄弟姉妹のいる家庭が減っています。この辺も、学力低下の原因に結びついているような気がします。



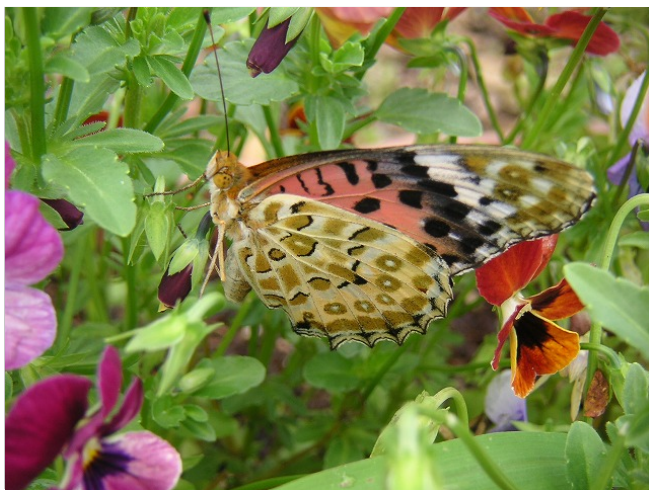
身近なお手本を真似て学習するのを、「観察学習（モデリング）」といいます。

A.バンデュエラは、これを発展させて社会学習理論を提唱しています。また、これを応用したのがイメージ・トレーニングと云われるものなのです。

その一方で『兄弟愛』という言葉もあります。気立ての優しい兄や姉は、年下の兄弟・姉妹に対して寛大です。ましてや、妹を気遣う兄や弟に対する姉の姿は献身的で、多くの小説やドラマのテーマになっています。最近の韓流ドラマにも、これ等を扱ったものが多くみられます。儒教の教えにより、年下の者が年長者を、敬い、立てる世界が底辺思想にあるのです。多くの作品では、小さい時に離れ離れに育った兄弟や姉妹が、何かのきっかけで敵対し、又は恋愛対象として登場しています。最後は、ハッピーエンドにならないケースが多く、その中に純粋な『愛』または『思いやり』の形が表されています。

伝説や星の世界に、その形骸が残されています。しかし、現在の世界はもっと複雑で、ドロドロとしたものなのではないでしょうか？よく、「骨肉の争い」という言葉が出てきます。『家族』という言葉を読すと『ファミリー』ですが、『兄弟』とも同義語です。時代劇で『兄弟！』というと、仁義の世界に係わってきます。

何となく、イタリアのマフィアとも繋がりが見えてきませんか？



掟の世界、「杯を交わす」とか「〇〇ファミリー」など、似たような世界です。

さらに厄介なのが、「異母兄弟」です。大奥の争いごとは、此処から始まります。将軍の嫡男になると、将来が約束され、当然その母親の地位も上がります。ですから、皆が挙って跡取りを担ぎ上げますが、出来の悪い長子の場合心配事が絶えません^^;

いつも次男に狙われているような気がしていたのでしょう。とても一緒に生活することは無理です。逆のパターンもあります。仲良く育った姉妹が、実は「異父姉妹」である場合、精神的な葛藤が描かれていきます。恋愛関係がもつれ、同じ男性を愛してしまった時に、恐ろしい戦いの炎が燃え上がります。



『骨肉の争い』とは、このようなケースを指すのでしょうか。

近代になっての相続での揉め事の多くが、このパターンではないでしょうか？さらにややこしいのが、連れ子や養子です。皆さん、どんどん深みに嵌っていくのがお分かりでしょう。児童虐待やDV（ドメスティック・バイオレンス）は、近代社会の副産物に他なりません。法律で許されれば何でもOKの世界、そこには予期せぬ争いごとの種が潜んでいるのです。



古い民話や童話では、そのような事を戒めるために幾つかの結末が用意されており、多くの人たちが子供の頃から何となく「学習」させられています。

ギリシャ悲劇やグリム童話、日本の民話にも同じような事例が多く残されています。道を外した生き方が、悲劇の結末を迎える訳ですから、それを避ける方へと向かいます。



ところが最近では、経済原理が至上主義の世の中になってしまい、今までとは価値観が大分変わってきているようです。人が作った法律ですから、抜け穴が一杯あります。利益を追求するためには手を変え品を変え、税金逃れや、危ない橋を渡りグレーゾーンを通り抜けることが出来る人が「優秀な人間」との評価を受けています。

(うさおさんの周りにも・・・)



もはや、モラルとか規範という言葉は「死語」になってしまったようです。「タツノオトシゴ」はそんな世界で生きていくのが嫌になり「建設業」から足を洗いましたが、移り住んだ「別の世界」も同じようなことをやっていました。

おかげでこの数年「法律と経済」には減法強くなりました(^_^;